

肥筑方言におけるサ詠嘆法

坂田, 佳江
熊本県立八代高等学校講師

<https://doi.org/10.15017/8930>

出版情報 : 語文研究. 97, pp.17-29, 2004-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

肥筑方言におけるサ詠嘆法

坂 田 佳 江

はじめに

九州の肥筑方言域では、接尾辞サを使って「山ン タカサー」とか「コン 花ン キレイサー」というような詠嘆の表現をする。この「サー」という表現を、『九州方言の基礎的研究』では「サ詠嘆法」と呼んでいる。先行研究で衰退の指摘されているこの用法について、これまでであった実態把握にとどまらず、具体的な衰退の過程を明らかにすることが本稿の目的である。

「サ詠嘆法」自体を研究対象とした数少ない先行研究のうちに、濱中氏(2000、2002、2003)がある。濱中氏は「外形の類似した『^(注1) - サ』と『^(注2) - 力』とを対照し、その異同を明らかにすることによって『サ詠嘆法』の実態記述を試みるという方法を^(注3)している(注は筆者)。本稿でも同様の方法をとるが、「サ詠嘆法」は詠嘆の場面でみられる用法であるから、これにあわせて詠嘆の場面での^(注4)「カ語尾形容詞」の用法と対照することとした。

1. 調査概要

データは2003年11・12月に行った熊本県北部・福岡県南部における臨地調査(以下「本調査」と呼ぶ)で得たものである。

調査地点には熊本県北部の7地点(南から 1. 熊本市 2. 植木町 3. 玉東町 4. 玉名市 5. 岱明町 6. 長洲町 7. 荒尾市)と福岡県南部の3地点(南から 8. 大牟田市 9. 柳川市 10. 久留米市)の計10市町村を設定した。

インフォーマントの年齢層区分は 高年層(60歳以上)、中年層(40~59歳)、若年層(20~39歳)、少年層(19歳以下)とし、区分ごとに男女2名ずつ(計4名)、各地点16名ずつ(合計160名)の資料を得た。各地点生え抜きの方で、年齢は全て調査時現在のものである。

調査で得たインフォーマントの情報を図1に示す。

図1：グロットグラム 年齢・性別対応表

高 年 層	71	71	67	73	75	67	73	65	67	64
	70	67	65	64	67	64	66	63	67	63
	63	66	63	63	63	63	64	62	65	62
	62	63	63	62	62	62	62	62	60	61
中 年 層	56	47	57	57	55	56	57	52	59	57
	56	47	51	56	52	52	50	49	56	56
	55	44	45	54	52	49	50	47	52	49
	44	44	44	50	47	48	46	40	45	46
若 年 層	27	36	38	32	33	38	36	34	39	38
	23	32	36	32	31	32	32	30	37	29
	21	31	30	32	27	25	26	30	35	26
	21	23	21	31	20	23	25	24	32	23
少 年 層	17	17	17	18	15	18	18	17	17	17
	17	17	17	18	15	18	18	17	17	17
	15	17	17	17	14	17	18	17	17	17
15	17	17	17	14	17	17	17	16	16	
年齢										
地点	熊本市	植木町	玉東町	玉名市	岱明町	長洲町	荒尾市	大牟田市	柳川市	久留米市

縦軸：年齢

横軸：調査地点

数字：インフォーマントの年齢

数字：男性（例：71...71歳男性）

本稿のグロットグラムのインフォーマント年齢・性別、調査地点は全てこの表に対応する。

調査項目とその分類を図2に示す。分類には文型番号を与えた。「-ノ+カ語尾形容詞」型などとして煩雑になることを避けるためである。下に示すように1文型、2文型、3文型、副詞共起文型としたが、あくまで便宜上のものである。

図2：調査項目とその分類

質問文 初めて富士山を見たとき。思いのほか高い山だということがわかりました。驚いて思わず「高いこと！」と言う場合、以下のように言いますか。

例文と分類

- ・ 高カー : カ語尾形容詞 一語文 (カ・1文型)
- ・ 高サー : サ詠嘆法 一語文 (サ・1文型)
- ・ コノ 山ノ 高カー : -ノ+ カ語尾形容詞 (カ・2文型)
- ・ コノ 山ノ 高サー : -ノ+ サ詠嘆法 (サ・2文型)
- ・ コノ 山 高カー : -+ カ語尾形容詞 (カ・3文型)
- ・ コノ 山 高サー : -+ サ詠嘆法 (サ・3文型)
- ・ (とても) 高カー : 副詞 + カ語尾形容詞 (カ・副詞共起文型)
- ・ (とても) 高サー : 副詞 + サ詠嘆法 (サ・副詞共起文型)

調査票には調査者が記入し、以下の4つの記号を使用した。(: その言い方を使用する。 : 聞くことはあるが、使用はしない。× : 使用しない。 : 終助詞をつけて使用する...タッカネー・タッカバイ等)

2. 調査結果

2 - 1. 1 文型

1 文型は、「カ語尾形容詞」「サ詠嘆法」両型において使用率が高かった。「カ・1 文型」は中・高年層ではほとんどの話者が使用した。

両型を比べると、低年齢になるほど使用率が低くなる 地点を南に移すほど使用率が低くなる という点で傾向が似通っている。

「カ・1 文型」と「サ・1 文型」両型を「使用する」と答えた話者のうち、中・高年層の話者はほとんどが「カ語尾」には終助詞（ネ、ナ、パイ、タイ等）をつける^(注5)とした。両型を使用する場合に「カ語尾」に終助詞をつけるという傾向は、若年層では薄れ、少年層では14人中2人とどまった。

興味深いのは、「カ語尾形容詞」で終助詞を付けなくなった話者のグループの中で「サ詠嘆法」を使用しない話者が出てくることである。そして、それ以降の年齢層では「サ詠嘆法」が使用されなくなった、あるいは使用されなくなりつつあるのではないかと思われる。このことを図にすると次のようになる。

図3：カ語尾形容詞・サ詠嘆法の使用と年齢

高年齢			低年齢
タカカーネー・タカカー等 (' : 終助詞付)	タカカー等 (: 使用する)	カ語尾使用しない (・ x : 使用しない)	
サ詠嘆法使用する (タカサー)		サ詠嘆法使用しない	

2 - 2. 2 文型

2 文型は比較的使用率が低い。とくに 岱明町と 長洲町を境に、やや北側の地点の使用率が低い。北部における使用率の低さは「サ詠嘆法」で顕著である。

また「カ語尾」は使用するが「カ・2 文型」を使用しない話者は低年齢層ほど多い。中・高年層と少・若年層の使用率（高年層85%、中年層66.7%、若年層33.3%、少年層23.8%）には大きなひらきがある。「カ・2 文型」において「 ' : 終助詞付で使用する」と答えた9名のうち5名が「サ・2 文型」と併用しており、多くが高年層に偏っている（4名が高年層、1名が中年層）。

「サ・2 文型」の使用率は高・中・若年層では40%台であるが、少年層では「サ詠嘆法」使用者18名中2名（11.1%）しか「サ・2 文型」を使用しない結果となった。

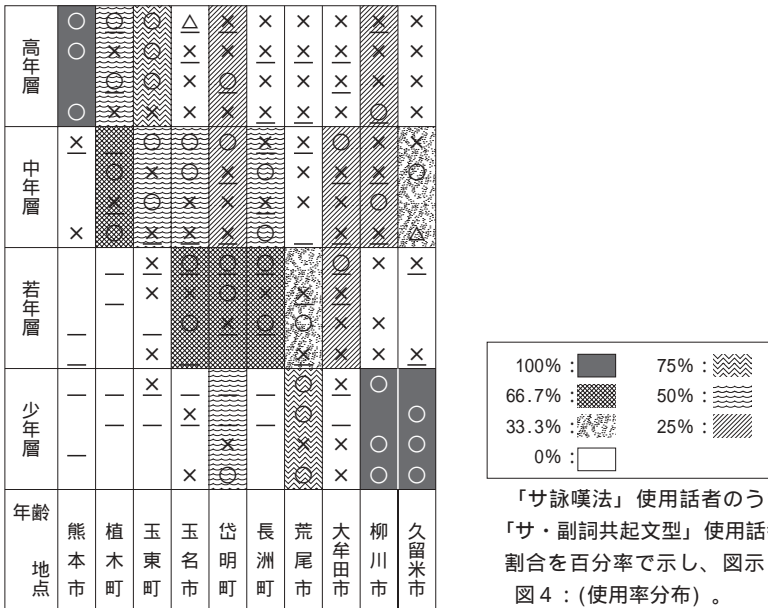
2 - 3 . 3 文型

年齢層・地点による大きな偏りはみられなかった。「力語尾形容詞」を使用する話者は高い確率で「力・3文型」を使用する。また「サ詠嘆法」を使用する話者のうち半数以上が「サ・3文型」を使用した。

2 - 4 . 副詞共起文型

図4：使用率分布

サ・副詞共起文型・使用状況グロットグラム



「力語尾形容詞」と「サ詠嘆法」に大きな差異がみられた。「力語尾形容詞」ではほとんどの話者が副詞共起文型を使用し、違和感のない自然な用法であることがわかる。「サ詠嘆法」では、使用話者の中でも「使用はまれ・めったに使わない」と内省した話者の割合が22.5%を占めたことから一般的な用法ではないことがわかる。

また 図4：(使用率分布) より、南下するほど高年齢層での使用率が、北上するほど低年齢層での使用率が高くなることから、北部地点の「サ・副詞共起文型」の使用は比較的新しく、南部からの流入ととらえることができるだろう。

注目されるのは南部（ここでは熊本市～玉名市とする）において、使用率の高い年齢層の次世代では、「サ詠嘆法」自体の使用率が著しく低下していることである。副詞との共起は、「サ詠嘆法」の衰退と深い関係があるとみてよいだろう。

3. サとカのみわけについて

「サ詠嘆法」の衰退は、「カ語尾形容詞」との（外形だけでなく）用法の類似が要因のひとつではないだろうか。

そうであれば双方が共存している地点・年齢層では両者の使われ方が違う（すみわけている）はずであり、「サ詠嘆法」が衰退しつつある地点・年齢層では用法の類似傾向がみられるはずである。

図5：グロットグラム 年齢・性別対応表

高 年 層	71	71	67	73	75	67	73	65	67	64
	70	67	65	64	67	64	66	63	67	63
中 年 層	66	63	63	63	63	63	64	62	65	62
	62	63	63	62	62	62	62	62	60	61
若 年 層	56	—	57	57	55	56	57	52	59	57
	—	44	45	54	52	49	50	49	56	56
少 年 層	44	44	44	50	47	48	—	40	45	46
	—	—	38	32	33	38	34	39	38	—
年 齢	—	—	36	32	31	32	32	30	—	—
	—	—	—	32	27	25	26	30	35	—
地 点	—	—	21	—	—	—	18	17	17	—
	—	—	—	18	—	—	18	—	—	17
熊 本 市	—	—	—	14	—	—	18	17	17	17
	—	—	—	17	14	—	17	17	16	16
植 木 町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
玉 東 町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
玉 名 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
岱 明 町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
長 洲 町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
荒 尾 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大 牟 田 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柳 川 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
久 留 米 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

ここでは分析に用いる母集団を「『サ詠嘆法』と『カ語尾形容詞』の併用話者」とする。図5に示したように、年齢が低くなるほど、また地点が南下するほど併用使用率が低くなる。

3 - 1. 2文型と3文型～使用率の比較から～

濱中氏は、「サ詠嘆法」では「「-サ」が先行語句と助詞を介さず接することは非常に稀である。」（濱中2000）としているが、本調査では「先行語句と助詞を介さず接」している3文型を「使用する」話者が予想よりも多くみられ、2文型を上回っている。

図6に「サ詠嘆法」の2・3文型の使用率分布図、図7に「カ語尾形容詞」の2・3文型の使用率分布をあげる。

図6「サ詠嘆法」では2文型よりも3文型のほうが使用率が高い。特に少・若年層では顕著である。

図6：サ2文型・使用率分布と、サ3文型・使用率分布

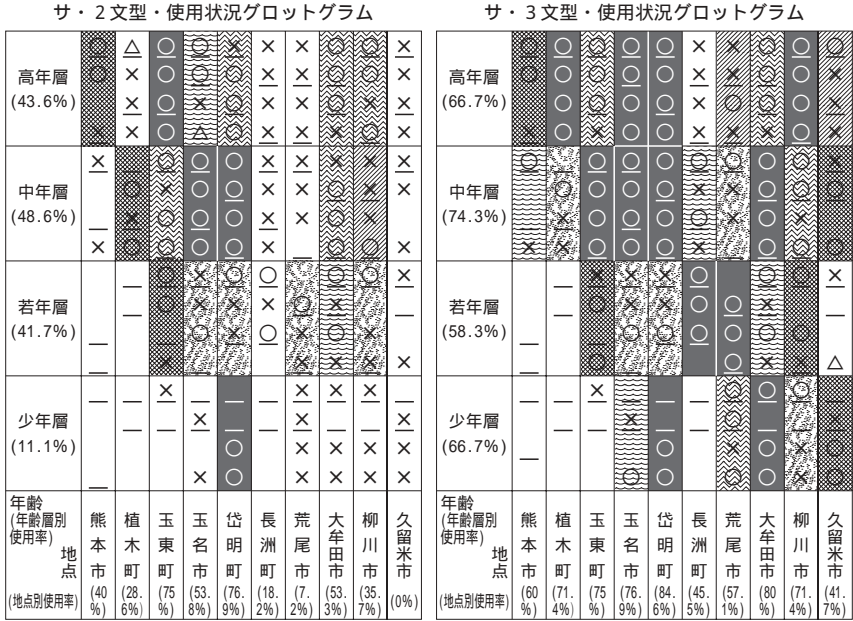


図7：カ2文型・使用率分布と、カ3文型・使用率分布

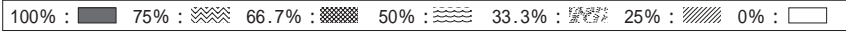
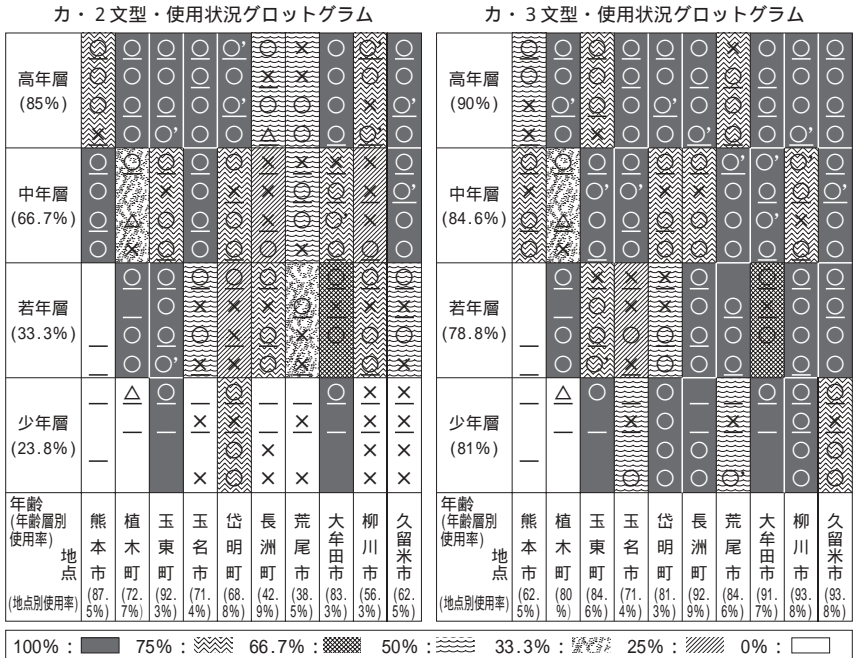


図7「カ語尾形容詞」でも、2文型よりも3文型の使用率のほうが高い。少年層に注目してみると、「サ詠嘆法」「カ語尾形容詞」併用話者14名のうち10名(71.4%)が「サ・カ両型において2文型を使用しない」話者である。また高齢層では「サ」「カ」併用話者37名のうち7名(18.9%)が「サ・カ両型において2文型を使用しない」話者である。

つまり少年層の7割は連体格助詞ノ自体を使用しないということになり、そのために「サ詠嘆法」で2文型よりも3文型の使用率が高くなっていると考えられる。この傾向は「カ語尾形容詞」でも同様である。

高年層では連体格助詞ノを使用することで「サ詠嘆法」と「カ語尾形容詞」を使い分けているようにみえる。しかし少年層では連体格助詞ノ自体の使用率が低いために使い分けが行えないのではないかと考えられる。使い分けの指標のひとつを失うことで、「サ詠嘆法」の衰退が起きるとすることは十分に考えられる。

3 - 2. 2文型からみるサとカのすみわけ

2文型において実際に「サ」と「カ」のすみわけが行われなくなりつつあるかをみていく。下に2文型の「サ詠嘆法」「カ語尾形容詞」の使用分布図 図8：サ・カ 使用分布図(2文型) をあげる。使用した記号の意味は次のとおり。

...「サ詠嘆法」「カ語尾形容詞」両方で2文型を使用する。	使い分けない
x...「サ詠嘆法」「カ語尾形容詞」両方で2文型を使用しない。	
カ...「カ語尾形容詞」の場合のみ2文型を使用する。	使い分ける
サ...「サ詠嘆法」の場合のみ2文型を使用する。	

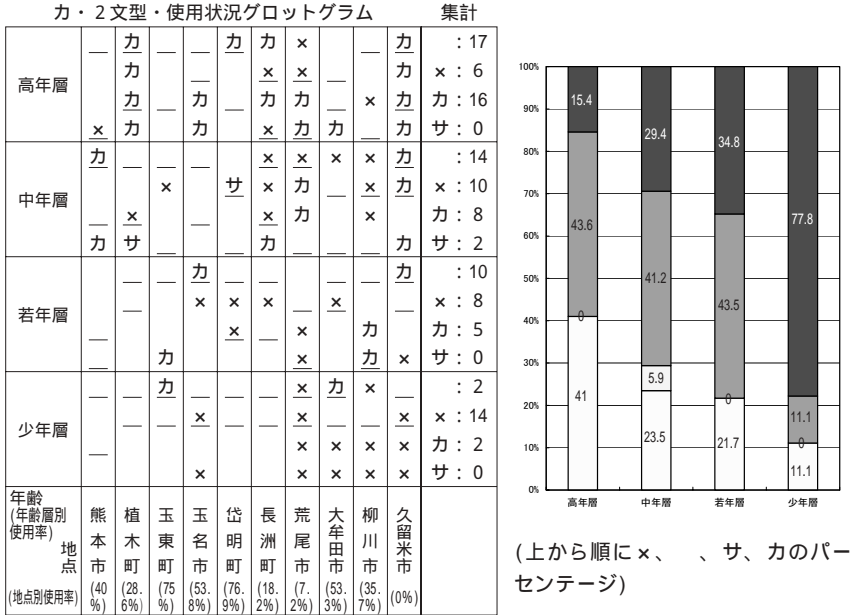
年齢層が若くなるにしたがって2文型での使い分け率(カ、サのパーセンテージ)が低下している。高年層の41%に対して、少年層では11.1%である。やはり連体格助詞ノの使用率の低い少年層で使い分けがあまりされていない。つまり外形・用法の類似による「サ詠嘆法」の衰退が起きつつあると考えられる。実際に使い分け率が低いグループほど「サ詠嘆法」の使用率が低いのである。

3 - 3. 1'文型とサ使用率の変化

ここからは、「'」(終助詞をつけて使用する)形を便宜的に「1'文型」と呼ぶ。1'文型は、「カ語尾形容詞」の一語文の形に近いが、語末に終助詞をつけて使用される。(例：タッカナー、タッカネー、タッカバイ、タッカタイなど)

1'文型は年齢層が低くなるほど使用されない傾向にある。(高年層：24名、中年層26名、若年層15名、少年層2名)また1'文型を使用する話者のうちほ

図8：サ・カ 使用分布図（2文型）と、パーセンテージ



とんどもが「サ詠嘆法」を使用する。(高年層：24 / 24名、中年層：25 / 26名、若年層14 / 15名、少年層2 / 2名)

次に示すのは1'文型の年齢・性別対応グロットグラム 図9：年齢・性別対応表(1'文型)である。母集団は「サ詠嘆法」「カ語尾形容詞」の併用話者で、このうちに占める1'文型使用者の割合がすなわち「サ」と「カ」を使い分けている話者の割合となる。1'文型を使用する話者は網掛けにしてある。右に示した使用率分布図では、色の濃い集団ほど「サ」と「カ」を(「カ」使用時に1'文型にすることによって)使い分けているとみることができる。

高・中・若年層においては1'文型使用率が60%以上と高い水準にあるが、少年層では11.1%と極端に低い。これは少年層での1'文型使用率、すなわち「終助詞使用による『サ』『カ』両型の使い分け」がほとんど行われていないことを示す。

さらに使用分布図をみると、「終助詞使用による『サ』『カ』両型の使い分け」をよく行うグループは、左上から右下にかけてひいた対角線の右上部に集中している。熊本市や植木町では中年層の併用話者がすでに「終助詞使用によ

図9：年齢・性別対応表（1'文型）と、使用率分布

高年齢層 (61.5%)	71	71	67	73	75	67	73	65	67	64	高年齢層	71	67	73	75	67	73	65	67	64	
	70	67	65	64	67	64	66	63	67	63		70	67	65	64	67	64	66	63	67	63
		66	63	63	63	63	64	62	65	62		66	63	63	63	63	64	62	65	62	
	62	63	63	62	62	62	62	62	60	61		62	63	63	62	62	62	62	62	60	61
中年層 (71.4%)	56	—	57	57	55	56	57	52	59	57	中年層	56	—	57	57	55	56	57	52	59	57
	—	44	45	54	52	49	50	47	52	49		—	44	45	54	52	49	50	47	52	49
	44	44	44	50	47	48	—	40	45	46		44	44	44	50	47	48	—	40	45	46
若年齢層 (60.9%)	—	—	38	32	33	38	—	34	39	38	若年齢層	—	—	38	32	33	38	—	34	39	38
	—	—	36	32	31	32	32	30	—	—		—	—	36	32	31	32	32	30	—	—
	—	—	—	32	27	25	26	30	35	—		—	—	—	32	27	25	26	30	35	—
	—	—	21	—	—	—	25	—	32	23		—	—	21	—	—	—	25	—	32	23
少年層 (11.1%)	—	—	17	—	—	—	18	17	17	—	少年層	—	—	17	—	—	—	18	17	17	—
	—	—	—	18	—	—	18	—	—	17		—	—	—	18	—	—	18	—	—	17
	—	—	—	—	14	—	18	17	17	17		—	—	—	—	14	—	18	17	17	17
	—	—	—	17	14	—	17	17	16	16		—	—	—	17	14	—	17	17	16	16
年齢	熊本市	植木町	玉東町	玉名市	岱明町	長洲町	荒尾市	大牟田市	柳川市	久留米市	年齢	熊本市	植木町	玉東町	玉名市	岱明町	長洲町	荒尾市	大牟田市	柳川市	久留米市



る『サ』『力』両型の使い分け」を行わない。玉東町以北では、それよりも低い年齢層の話者が使い分けをあまりしていない。使い分けを行わない（あるいはほとんど行わない）話者は、北部のほうでより低い年齢層に属している。「終助詞使用による『サ』『力』両型の使い分け」を行わなくなるという変化が南から北へと進行しているといえよう。

これは「サ・副詞共起文型」の使用と非常によく似た流れであり、両変化を起こした年齢層がほぼ重なっているのである。「(サ・副詞共起文型の) 使用率の高い年齢層の次世代では、『サ詠嘆法』自体の使用率が著しく低下している」という事実と合わせると、以下のようにいうことができよう。

「終助詞使用による『サ』『力』両型の使い分け」を行わない（あるいはあまり行わない）年齢層と、サ・副詞共起文型をよく使用する年齢層の次世代では、『サ詠嘆法』の使用率が著しく低下する。

4. 接尾辞サ

4 - 1. 喚体表現としてのサ

濱中氏は（濱中2000）中において、

「サ詠嘆法」^(注6)は山田文法における感動の喚体句の一種と解される」(中略)

すなわち、「- サ」は、呼格用法に立つ体言と等価の働きをしていると解される。活用がなく、装定・述定に用いられず、連体修飾語句が先行することなどは、このような体言性を物語る事実と言えよう。

と述べている。(注6は筆者)

「サ詠嘆法」は「- サ」の形式が体言であって、「一つの内容を述語によって述べ上げ、言い切るという形式によって表現する句(述体句)と、そうでない形式によって表現する句(喚体句)」(尾上1986)の後に分類することができる。また連体格助詞ノをともなうことで、喚体句としての色合いを強めている。終助詞ノの使用の衰退はすなわち「サ詠嘆法」2文型の衰退である。2文型「- ノ - サ」が失われれば、非常にまれな口語の感動の喚体句としての外形が失われることになるのではないか。

「サ詠嘆法」の体言性については、濱中氏の言うように「活用がない」こと、「装定・述定に用いられ」ないことから疑うところはない。実際に本調査においても、終助詞をともなう例は一例も聞かれなかった。「カ語尾形容詞」における「タカカツ」などのように活用する例もなかった。副詞共起文型での「サ詠嘆法」の使用が著しく低いことも、「サ詠嘆法」が形式では体言として使われていることの一証拠となるだろう。

「サ詠嘆法」において2文型の使用が少なくなると、次に1'文型の使用が低下する。これとほぼ同時にサ・副詞共起文型が現れているようである。この変化が現れる年齢層の次世代では「サ詠嘆法」が衰退している。

「サ詠嘆法」の、喚体句としての用法が薄れれば、「カ語尾形容詞」との根本的な区別の柵がひとつ取り払われたことになる。

4 - 2. 接尾辞サのこれから

「サ詠嘆法」と「カ語尾形容詞」が2文型において「- ノ - サ」の形の対立を保っていれば、次のことがいえる。

- ・「- ノ - サ」は文全体が体言であり、連体格を持つ喚体句である。
- ・「- ノ - カ」は「一つの内容を述語によって述べ上げ、言い切るという形式によって表現する」(尾上2001)述体句である。

この根本的な文の構造の違いは、先行語句を省略し「- サ」「- カ」のみ使用したとしても、依然として存在している。さらに体言である「サ詠嘆法」では副詞は共起せず、述語である「カ語尾形容詞」では副詞が共起する。

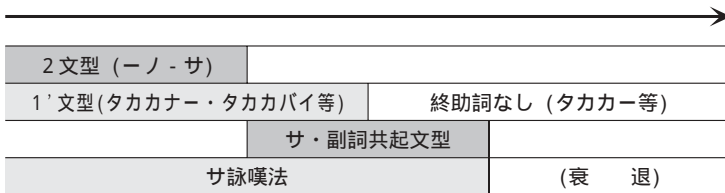
ところが、連体格助詞ノがあまり使われなくなると「- ノ - サ」と「- ノ -

力」が使われなくなる。そのために、喚体・述体という根本的な、かつ大きな違いが失われる。そして1'文型による使い分け（例：タカカネーとタカサー／話しかけと独白）が行われなくなる。さらに「(とても)タカカー」と同じように副詞共起文型「(とても)タカサー」が使われるようになる。結果「サ詠嘆法」と「力語尾形容詞」は外形・意味用法の両側で非常に類似することになる。差のない複数のことばが同時に存在すれば、どちらか一方が衰退することは自然な流れであろう。

活用せず現場でのみ用いられる「サ詠嘆法」と、活用してさまざまな語と合わせることができて詠嘆の場面以外でも盛んに用いられている「力語尾形容詞」、この二種を考えた場合、用法に限定のある「サ詠嘆法」が衰退するであろうことは容易に想像できる。実際に本調査において「サ詠嘆法」が衰退しつつある現状を確認している。すでに 熊本市、 植木町においては若い世代で「サ詠嘆法」が使用されなくなっている。

最後に本稿で述べた「サ詠嘆法」の衰退の流れを図示し、まとめとする。

図10：サ詠嘆法の衰退の流れ



「サ詠嘆法」は、肥筑方言域において衰退過程にある。その流れは以下のように推定される。

まず2文型が使用されなくなり、1'文型も使用されなくなる。さらに副詞と共起する用法が現れる。喚体句の枠を外れ、体言性も揺らいだ「サ詠嘆法」は、外形・用法ともに「力語尾形容詞」の詠嘆の表現に近づき、衰退していく。また、この変化は南部から北部へかけて進行していくものであると思われる。

おわりに

ここまで肥筑方言域のうち熊本県熊本市から福岡県久留米市にかけて行った「サ詠嘆法」に関する実態調査をもとに分析・考察を試みた。先行研究では指摘されつつも具体的な道筋の示されていなかった、「サ詠嘆法」の衰退状況と

その流れを見ることができたのではないかと思う。

なお本調査において、「サ詠嘆法」の衰退に関係すると思われる、連体格助詞ノの使用率低下と終助詞による「サ」「カ」使い分け率の低下については、データとして得ることができたのみである。この両者の使用率が、なぜ低下、そして衰退した（もしくはしつつある）のかという点までは踏み込むことができなかった。この点が明確になれば本稿はより深まったのではないかと悔やまれる。今後の課題としたい。

注

- (注1・注2) 濱中(2000)にならって、以下『痛サー』『赤サー』『良サー』などにあたる部分を『-サ』、『痛カ』、『ニガカ』にあたる部分を、便宜『-カ』と記す。
- (注3) 濱中(2000)
- (注4) 尾上(1986)の「()『急激な感情的経験である』ということと、それが()『ある対象との遭遇によって生じた』ということの、両者を一挙に表現」する「感嘆」を含む。
- (注5) 『タカカ(タッカ)』では言い切ることができない。言い切る場合に『タカサ』を使用する」という内省もみられた。(植木36男性・大牟田62男性)
- (注6) 濱中氏は「サ詠嘆法」とは、(1)腹ン(腹の)痛サー。のような形式で現れる言い方の総称である。」としており、「痛サー」にあたる部分を便宜「-サ」と記している。本稿では「-ノ(ン)-サ」という形式に限らず、詠嘆や感嘆の場面に現れる「-サ」の形式を「サ詠嘆法」と呼ぶ。

参考文献

- 尾上圭介(1986)「感嘆文と希求・命令文・喚体・述体概念の有効性-」『松村明教授古希記念 国語研究論集』(明治書院)
- (2001)『文法と意味』(くろしお出版)
- 神部安泰(1980)『九州方言の表言論的研究』(和泉書院)
- 九州方言学会編(1969)『九州方言の基礎的研究』(風間書房)
- 濱中 誠(2000.6.)「佐賀県武雄市における「サ詠嘆法」の実態報告」『都大論究』37(東京都立大学国語国文学会)
- (2002.6.)「熊本県下益城郡松橋町における「サ詠嘆法」の実態報告」『都大論究』39(東京都立大学国語国文学会)
- (2003.7.)「言語変化から見た「サ詠嘆法」-福岡県南部での調査データを中心に-」(第十六回九州方言研究会発表資料)
- 村上智美(2002.5.)「熊本方言における「寂ッシャシトル、高シャシトル」という形式について」(国語学会2002年度春季大会発表資料)
- 山田孝雄(1907)『日本文法論』(宝文館出版)
- (1936)『日本文法学概論』(宝文館出版)

[付記] 調査を実施するにあたってさまざまな方からご指導・ご教示をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。お忙しい中ご教示下さった話者の方々並びに御協力下さった植木町役場、玉東町役場、玉名市役所、岱明町役場、岱明町立図書館、長洲町役場、長洲町立健康センター、大牟田市役所生涯学習課、柳川市役所のみなさん、そして熊本県立玉名高等学校のみなさん、特に直接お世話頂いた河内正一教諭、本当にありがとうございました。

(さかた よしえ・熊本県立八代高等学校講師)